

リュウキュウマツ Open	300 (200)	112.28 ± 22.33	1.16 ± 0.21	8.73 ± 1.15
タイワンアカマツ Open	300 (200)	132.17 ± 17.85	0.97 ± 0.12	8.06 ± 1.16

4. む す び

クロマツ×リュウキュウマツ、およびクロマツ×タイワンアカマツの F₁ 雑種の生育は旺盛であり、特にクロマツ×リュウキュウマツの雑種はリュウキュウマツの生長量と同じ程度かそれ以上のものをしてしめし、雑種強勢現象を現わすのではないかと考えられる。このことから現在リュウキュウマツは、1年生で山出しを行なっているが、この雑種も播種、養苗の検討を行なえば1年生山出し苗となる可能性がうかがわれる。ま

た針葉の大きさは、長さで両親種より大きくなり、巾ではリュウキュウマツに近い数値を示し、リュウキュウマツによく似た針葉の形質を表わすことが認められた。クロマツ×タイワンアカマツでは針葉の長さ巾とも両親種のやや中間型に表われ、量的型質の遺伝を示すようにみられる。しかし葉色における表現型は、タイワンアカマツがクロマツに対し優性として表われることが観察できる。

21. 接木可能性とその親和性の推定

—Acacia mollissima の育種学的研究 (IV) —

長崎県総合農林センター 西 村 五 月

Acacia 属には極めて自家不受精性の強い species があることが知られているが、mollissima もこの性質が極めて強い。この様な植物の育種に当っては、劣悪個体を除外して行くと同時に、優良個体による採種圃を造成して行く必要がある。更に積極的な増産を計画するならば、優良個体のクローンによる採種圃を作り、これら優良系統間における雑種集団による造林が考えられる。

この目的を達成するには挿木がもっとも容易であるが mollissima は挿木が不可能である。空中取木は比較的生長の旺盛な樹令（生理的樹令）では極めて有効な方法であるが、全形質を知り得る成木になれば極めて発根が悪くなる欠点がある。

その点、接木によれば樹令による影響も少く、且つ数多くの穂木が得られる等の利点が考えられる。

この見地から接木、殊に春期の切接ぎと、秋期の芽接ぎを主体に検討し、併せて種間の接木親和性についても知見を得たので報告する。材料は長崎県営湯江苗畑内にある7年生の母樹より採種し、台木は播種後1ヶ年経過した根元径5~7mmの苗を用いた。芽接ぎには1ヶ半経過したものを利用した。接木を実行したのは1963年である。

接木は上述の台木を地上約10cmの点で切断し、穂木

は直徑3mm前後の大きさの一年枝（前年の伸長枝）とし、長さ約3cmとした。結束はビニールテープで常法どおりとした。接木の結果は次表に示すとおりである。

この時期における穂木の芽の動きは未だごく初期であった。したがって新芽は僅かに黄色味を帯びている程度である。

接 木 の 結 果

穂木採取日	接木日	接木数	活着数	穂木処理法
3.16	3.16	20	0	ナシ
3.26	3.31	20	0	土中埋ぞう
		20	0	冷ぞう
	4.10	20	0	土中埋ぞう
		20	0	土中埋ぞう・ビニールフード被覆
		20	0	冷ぞう
	4.19	20	2	冷ぞう・ビニールフード被覆
20		0	土中埋ぞう	
	20	0	冷ぞう	

第1回(3月16日)接木は失敗した。これは、採穂直後に接いたが、それよりも時期的に尚早の感じがあった。そこで第1回接木より穂木の観察を始めた。ようやく芽の動きを察し得た3月26日に採穂し、約10cmの長さにして土中に埋める方法と、冷ぞう庫(+6°C)にビニール袋に包んで格納する方法にわけた。また、接木後ビニール・フードの被覆の有無も併せて組合せた。

4月10日の接木では、冷ぞう庫格納穂木は芽の動きが接木に最適に感じられた。4月19日には冷ぞう庫格納穂木にはやや傷みが感じられたし、土中埋ぞう穂木は新芽が伸びすぎていたので試験を中止した。また、秋の切接ぎは全く見込みがなかった。

この結果からすれば冷ぞう庫格納は極めて有効であり、またビニール・フードの利用も効果が大きいと考えられる。土中埋ぞうも更に検討すれば可能であらう。この試験結果からすれば、未だ実用的には無理であるが、要は気温に対して極めて敏感に反応する本樹の接穂の春芽化の程度と台木の樹液の流動を科学的に知る事によって、接木の可能性は充分あると考えられ

る。なお、接木した樹の生長は当年は緩であるが、翌年はスムーズであった。

芽接ぎは接木の可能性と同時に、種間親和性も推定しようとした。接木は9月10日から10月17日迄試みた。その結果、9月中旬には極めてよい成績が得られた。すなわち mollissima を台木として、mollissima を接げば15活着/15接となりまた dealbata を接いだ場合には、14活着/15接となった。時期的にはこの頃がもっともよく(年により若干変動はあろう)、それ以降は活着が悪かった。芽接ぎの場合は必ず樹皮の薄い枝に処理することが条件である。

種間親和性については、前記 mollissima 台木に mollissima および dealbata は活着したが、Baileyana の場合は活着しなかった。これら3種間の交互接木では前述の組合せ外は何れも失敗した。しかし、これらは台木にも若干の問題点があり親和性への結論は次期試験の結果にまちたい。

なお、芽接ぎした場合は、整枝等について特別な考慮を払わないと、接いだ芽が衰弱したり、小枝となってしまう等の問題がある。

22. 九州産スギ現地適応試験について〔第1報〕

大分県林業試験場 佐 藤 利 彦

まえがき

九州には地方地方によって、優良なスギ品種が造林されているが、それはその地方だけにおける優良品種であるか、或は他の地方においても良好な成長をするものであるか不明であるので、この点の解決端緒を掴む方法としてこれら優良品種を県内各地に植栽して、どんな成育課程をたどり、どのような成長をするかを比較検討するため、林試九州支場を中心に九州各県林業試験場指導所共同の研究テーマとして取上げ夫々の機関の協力を得てスギ優良品種の地域に対する適応性を比較検討し、その地方に最適の優良品種を選抜するための試験である。

試験方法

このため當場としては日田林業の中心地日田市郡、玖珠郡に試験地を設定して大分県内の優良

品種である。ヤブクグリ。アヤスギ。ウラセバルスギ。ホンスギ。アオスギ。クマンドスギと新品種のヒノデスギ。モトエスギと熊本県産のヒゴメアサ。クモトオン。宮崎県産のクノアカ。オビアカ。アラカワ。鹿児島県産のキジン等夫々の各品種を植栽し成長比較及び病害虫や気象関係並びに各品種の立地に対する適応性等を試験し特性の調査をなすため、昭和29年度(1ヶ所)30年度(3ヶ所)31年度(3ヶ所)35年度(1ヶ所)36年度(3ヶ所)39年度(3ヶ所)設定し5ヶ年間は毎年測定調査してきたが、このたびは県下で最も植栽造林面積の広い品種のヤブクグリスギを主要地とする地域帯にある試験地について次表のとおり成長経過を報告します。試験地は1年生挿苗を傾斜面の下方から上方に向けて列状に1.8m×1.8mの間隔として深さ30cm、横巾50cmに耕耘し丁寧に植付けた。下刈は毎年6月～8月に1回～2回実施して撫育管理に努めたが各区とも無施肥である。